

対岸から見れば — 日本語から英語へ（文学作品の場合）

桑 野 英 正

はじめに

むかし、非常勤講師として某私立大学で週一回教えていたことがある。当時、国立大生と一部私立大生との学力差は今より相当大きかった。英語を読んで訳すことだけに90分をあてることは、教師にとっても学生にとっても、地獄で責苦にあうようなものであった。そこで、切羽詰まって考えた—日本語を読んでゴマカスという手があるではないかと。とはいっても英語の授業なのだから英文を読まないわけにはいかない。日本語を読んで英語を読んで、なんとなく〈教養〉が身についたと学生にサッカクさせるにはどうしたらいいか。このような不屈きな考えから、日本文学作品と、それを英訳したテキストをあわせ読む授業をはじめようになった。その後、大学をめぐる状況もいちじるしく変わる。そのこともあって、ここ数年、金沢大学の教養的科目英語Bでもこのようなかたちの授業を続けている。はじめた動機はともかく、この授業形態も捨てたものではないのだが、その話は後日に譲る。小論は、というかこの覚書は、これらの経験を通して個人的に興味をおぼえた事柄を気随気ままに取りあげ、論評を加えてみようというわけである。

気随気ままに、といかにも一人歩きしているようなモノ言いをしたが、じつは、丈夫な樫の杖をついている。日本文学研究者であり、また豊かな翻訳歴をもつ Donald Keene 氏の『翻訳論』⁽¹⁾ という杖である。従って、これから筆者が書き記すことは、正確、かつ正直に言うと、氏が論じている点をいわば実

地に検証した、ただそれだけの報告書にすぎない。しかし、あえて弁明すれば、検証作業をしていく過程で〈見えてくるもの〉があったということである。日本語を母語として教室で英語を読み訳すことに人生の大半を費やしてきた筆者にとって、英語を母語とする文化圏で育った人間が、日本色の濃い文学作品を翻訳する手際や不手際に教えられるところ多々あった。遅きに失したが、いずれ通らなければならない道であった。

I 漢 字

漢字かなまじりの日本語文章にふだん接している我々でも、時として漢字につまずく。読みがわからない。例えば、国境の長いトンネルを抜けると雪国であった、という『雪国』の出だし。クニザカイなのかコッキョウなのかわからない。越後の国と上野の国の境なのだからクニザカイだろうと勝手に思い込んでいたのだが、加藤剛の朗読CDを聞くとコッキョウと音読している。中国と印度のコッキョウではあるまいし、と筆者などはついつい思ってしまう。音読しようかと訓読しようかとどちらでもいいじゃないかという意見もあるだろうが、受ける感じがあきらかに違うことを考えれば、この種のことにこだわらざるをえない。

ことほどさように、日本語を母語とする日本人までも迷わす「漢字」であるが、人名や地名などの場合、よほど特別の読みでないかぎり、我々は慣用的な読みを知っていて、間違えることはない。江波さん、はエナミさんであり、石川県はイシカワ県である。コウハさんではないし、セキセン県ではない。同じように、常磐線の読みはジョウバン線であって、トキワ線ではない。しかし、日本語を母語としない翻訳者は、時としてこういった類いの間違いもする。

- * 常磐線の踏切から切通しのだらだら坂を登って少し行くと彼方の桑畑に散兵しているのが見えた。百姓が処々に一トかたまりになってそれを見物していた。

志賀直哉『十一月三日午後の事』⁽²⁾（下線筆者 以下同じ）

- * From the intersection of the Tokiwa line, we'd come up the gradual slope of the railway cut a short ways when in the mulberry fields beyond we saw a skirmish taking place. Groups of farmers, here and there, were looking on.

Lane Dunlop(tr.): *Incident on the Afternoon of Novenber Third*⁽³⁾

上の例はたんなる早とちりであってほとんど実害はなく、反って頬笑ましいくらいだが、つぎのような例に接すると少し考えてしまう。

- * 黒川先生は四国の生れで、つまり何かの事情で郷里に帰る折りに父を誘ったものらしいが、病中の父がいかにもなつかしさに語ったのは松山での出来事であった。道後の茶店で休んでゐると、居合せた坊主に馴れ馴れしく話しかけられ、そのうち三人で酒を飲みだして、結局すつかりこちらで持つことになったといふのである。

「たかられたの？」

丸谷才一『横しぐれ』⁽⁴⁾

- * The two of them met up with a priest who quite unceremoniously engaged them in conversation, and all three started drinking together, the upshot being that they spent a good part of the afternoon in a place where they'd only expected to stay a short while.

“The priest cadged drinks off you?”

Dennis Keene(tr.): *Rain in the Wind*⁽⁵⁾

推量するに、翻訳者は「持つ＝負担する」の意味を知らなかったのではないか。仮に知っていたとしても、記憶の奥底にかすかに残っている程度であったため、一旦飛びついた、わかりやすい、なじみの動詞「待つ」の思い込みから抜け切れなかったのではないだろうか。おまけに、「こちらで」という場所をしめす副詞にまで伴われているものだから、益々「待つ」の先入観に囚われて

しまったものとおもわれる。これ以上翻訳者の心理を推測してみてもはじまらないが、この箇所間違いに「漢字」が多少関係していることは確かだろう。

次に、「漢字」をあざやかに捌いている例を見てみよう。

- * 自分は起訴猶予になりました。けれども一向にうれしくなく、世にもみじめな気持で、検事局の控室のベンチに腰かけ、引取り人のヒラメが来るのを待っていました。

背後の高い窓から夕焼けの空が見え、鷗が、「女」という字みみたいな形で飛んでいました。

太宰治『人間失格』⁽⁶⁾

- * The charge against me was suspended, but this brought me no joy. I felt utterly wretched as I sat on a bench in the corridor outside the district attorney's office waiting for the arrival of my guarantor, Flatfish.

I could see through the tall windows behind my bench the evening sky glowing in the sunset. Seagulls were flying by in a line which somehow suggested the curve of a woman's body.

Donald Keene(tr.): *No Longer Human*⁽⁷⁾

女に惚れられるために生まれてきたような主人公が、銀座のカフェの女給と鎌倉の海で入水する。女が死んで、男だけ助かる。上に引いたのは、自殺幫助罪で検事に取り調べられたあとの場面。〈女〉との縁が切れることのない主人公の目に、鷗の飛んでいる様子までもが〈女〉という漢字に見えてくるというのであるが…

この部分が字句通りに訳してあるとしよう。「漢字」をまったく知らない読者でも、もちろんその意味はわかるだろう。しかし、作品の魅力は一部失せてしまう。そこで、翻訳者は、「カモメが並んで飛んでいた。なんとなく女体の曲線に見えてくる」と訳す。処理が冴えている。

※ 翻訳者の名前が同じ Keene で紛らわしいが、first name を見ればわかる通り二人は別人である。

II 削 除

研究者のためではなく一般読者のための翻訳であれば、部分削除ということも当然ありうる。先にあげた『翻訳論』のなかで、Donald Keene 氏は、ある戯曲を訳したときの経験を語っている。麗しき乙女を描写して Her face was like an hibiscus flower, and her brows were willow-leaves. ときたあと、さらにもうひとつ文章があった。氏の英訳をそのまま写せば、Her face was like an hibiscus flower with a nose and mouth attached. 笑いをさそう意図はまったくなく、原作者は大まじめなのだから、ここで原作に忠実に、この一文を削除することなく英訳を続ければ、作者を裏切ることになる、と氏は言う。この指摘をふまえて言えば、なかにはどうして削除されているのか理解できない時もあるにはあるが、大体において、その理由を推測することができる。

— あくまでもスイソクである。

* 女の耳の凹凸おうとつもはっきり影をつくるほど月は明るかった。深く射しこんで畳が冷たく青むようであった。

駒子の唇くちびるは美しい蛭ひるの輪のように滑らかであった。

「いや、帰して。」

「相変らずだね。」と、島村は首を反って、どこかおかしいようで少し中なか高だかな円顔を、真近ながに眺めた。

川端康成『雪国』⁽⁸⁾

* The moonlight, so bright that the furrows in the woman's ear were clearly shadowed, struck deep into the room and seemed to turn the mats on the floor a chilly green.

“No. Let me go home.”

“I see you haven't changed.” Shimamura raised his head. There was something strange in her manner. He peered into the slightly aquiline face.

Edward G. Seidensticker(tr.): *Snow Country*⁽⁹⁾

ご覧の通り、英訳には下線の部分にあたる箇所がない。最初は翻訳者の見落しによるたんなる偶然かと思ったが、日本語をじっと眺めて、そこに並んだ言葉から浮かび上がる映像を前にしたとき、なんとなく納得した。蛭の輪を美しいとおもう感性は尋常ではない。不気味でさえある。魅力的な女主人公の唇が蛭の輪のように滑らかという比喻では、多くの読者の響感を買うとの判断だろう。もう一つ別の例をあげると、

- * …^{げんそく}舷側をすぎて行く規則正しい波の音と、単調なディーゼルエンジンの音に伴奏されて、この規則正しい風景は、その時私に^{はなは}甚だ奇怪に思われた。偶然安定した気圧の下に、太陽が平均した熱を海面に注ぎ、絶えず一定量の水蒸気を蒸発させる以上、一定の位置に、同形の雲を生じるのになんの不思議はなかった。そして機械によって一定した速度で進む船から眺める以上、風景が一様の転移を見せるのも当然であった。私は即座にこう反省したにも拘らず、私の昂奮はなかなか去らなかった。そこには一種快い苦痛のニュアンスがあったのである。

大岡昇平『野火』⁽¹⁰⁾

- * …With the regular sound of the waves lapping the sides of the ship and the monotonous hum of the diesel engines, the whole orderly scene suddenly struck me as very *strange*.

I felt a peculiar excitement - an excitement tinged with somehow pleasurable pain.

Ivan Morris(tr.): *Fires on the Plain*⁽¹¹⁾

補充兵として召集され、フィリピンへと向かう輸送船の上で、主人公がまわりを眺め、考えている場面である。観察と内省、これがこの中年男の特性と設定されている以上、描写が理屈っぽくなるのは必然で、それがまたこの小説の取り柄でもあるのだが、上の場合は度が過ぎ、興を殺ぐとの判断だろう。

Ⅲ 付 加

文化的背景が違うと、意味する内容が読む人に適切に伝わらない語句も出てくる。脚注を付ければ問題はないが、読者の意欲は萎えてしまう。そこで、なにがしかを付け足し、理解に必要な最低の説明を本文中ですることになる。まずは単純な、単語についての解説を加えている例をあげると、

- * この頃は黒いモンペをはいた上品な母親がいつも田部夫人の病室につきそっている。

遠藤周作『海と毒薬』⁽¹²⁾

- * Recently Mrs Tabé's refined mother had been in her room almost constantly. She wore black monpe, the trousers that had become equivalent to a uniform for women during the War.

Michael Gallagher(tr.): *The Sea and Poison*⁽¹³⁾

モンペ、と日本語の単語をそのまま書き写し、それに続けて「戦時中女性にとって制服の一部みたいになっていたズボン」と説明する。

次の例はもう少し複雑だが、考え方は同じである。

- * 温泉宿で女按摩から芸者の身の上を聞くとは、余りに月並で、^{かえ}反って思いがけないことであったが、駒子がいいなずけのために芸者に出たというのも、余りに月並な筋書で、島村は素直にのみこめぬ心地であった。それ

は道徳的な思いに突き当たったせいかもしれなかった。

川端康成『雪国』⁽¹⁴⁾

- * It was almost too ordinary a thing to hear gossip about geisha from the hot-spring masseuse, and that fact had the perverse effect of making the news the more startling; and Komako's having become a geisha to help her fiancé was so ordinary a bit of melodrama that he found himself almost refusing to accept it. Perhaps certain moral considerations - questions of the propriety of selling oneself as a geisha - helped the refusal.

Edward G. Seidensticker (tr.): *Snow Country*⁽¹⁵⁾

上の例では、「道徳上考えなければならないある種の事柄」に続けて、「芸者として身を売ることが正しいかどうかの問題」という短い具体例をあげ、必要以上に読者が立ち止まらなくても済む仕掛けになっている。

しかし時代が古くなると、誰にでも想像がつくことだが、脚注なしでは済まされない。例えば、Donald Keene 氏訳の『おくのほそ道』では56の脚注がある。それでも、冒頭の原則は、可能なかぎり貫かれている。一例をあげると、

- * 三代の栄耀えよういっすい一睡うちの中にして、大門の跡は一里ありこなたに有。秀衡が跡は田でん野やに成なりて、金鶏山きんけいざんのみ形を残す。

松尾芭蕉『おくのほそ道』⁽¹⁶⁾

- * The three generations of glory of the Fujiwara of Hiraizumi vanished in the space of a dream. The ruins of their Great Gate are two miles this side of the castle. Where once Hidehira's mansion stood there are now fields, and only Golden Cockerel Mountain, the artificial hill constructed at his command, retains its old appearance.

Donald Keene(tr.): *The Narrow Road to Oku*⁽¹⁷⁾

奥州藤原氏三代はともかく、金鷄山に至っては日本人向けでも注が要る。しかし、訳者は脚注を避け、本文のなかに「彼の命令で築かれた人工の小山」という語句の挿入で処理している。

IV 換 言

英語の文章を読み慣れた人は誰でも、語句の言い換えが頻繁に行われることを知っている。それに対し、日本語の文章では、同じ語句の繰り返しもさしてめずらしくない。考えてみるに、よほど幼稚な作文は別にして、通常は、適度な反復が意味を明瞭にし、アクセントの役割を演じるからだろう。となれば、もともとそのような性質の日本語を英語らしい英語に換えようとするとうなるか。英文にしてわずか10行たらずの段落のなかで、どのような変換がなされているか見てみよう。

* 木口は復員した後、あの地獄を二度と思い出したくなかった。誰にも語りたくなかった。語ったところで日本で生きてきた女、子供たちにわかる筈はない。女、子供たちだけではなくたとえ軍隊にとられたとしても、安全な基地で悠々と終戦を迎えた連中に理解できる筈はない。それを身をもって知っているのは、樹海を通りぬけ、「死の街道」と後になって兵が呼んだ街道を共に歩いた戦友だけだった。そして塚田は木口にとってその地獄を通りぬけた大事な戦友だった。

遠藤周作『深い河』⁽¹⁸⁾

* After Kiguchi was repatriated to Japan, he never wanted to remember that hell again. He didn't want to talk to anyone about it. Even had he chosen to discuss it, there was no reason why the women and children who had remained in Japan could comprehend it. Those who were drafted and indolently welcomed the conclusion of the war at bases far from harm's way could not begin to grasp it. The only ones

who could truly understand what they had been through were their comrades who had passed through the sea of trees and hobbled with them along the road that the soldiers would later call the 'Highway of Death'. Tsukada was the valued war comrade who had journeyed through that inferno with Kiguchi.

Van C. Gessel(tr.): *Deep River*⁽¹⁹⁾

上の用例をまとめると、

(1)地獄	hell
地獄	inferno
(2)わかる	comprehend
理解できる	grasp
身をもって知っている	understand
(3)通りぬけ	had passed through
通りぬけた	had journeyed through

(2)の場合は、原作でも言い換えがしてあるので、英訳で異なる単語が使われるのは当然だろう。その意味では、ここで取り上げべきではないかもしれない。それをあえて持ち出したのは、(1)と(3)を合わせて総合的に考えれば、論点がはっきりすると思ったからである。

しかしこの習癖も、度を越せば病癖と呼んだがほうがよさそうだ。次は、上にあげた段落につづく箇所である。

* 疲労困憊して、ただ足を引きずっている時、夢をみているのか、意識があるのかさえよくわからない状態になる。木口は、そばに、もう一人の自分が歩いているのを見たことさえある。

「歩け、歩くんだ」

もう一人のその自分が、ともすると体の崩れそうになる木口を叱りつける。

「歩け、歩くんだよ」

あれが幻覚だとは、生き残ってからも木口にはとても思えない。たしかに全く同じ、もう一人の自分が傍らで彼を叱責していた。

遠藤周作『深い河』⁽²⁰⁾

- * As they dragged their legs along in utter exhaustion, they lost track of whether they were dreaming or awake. Kiguchi had seen an exact replica of himself walking alongside him.

‘Walk! You must keep walking!’ His double, or perhaps the Kiguchi who was about to collapse physically, had bellowed at him.

‘Walk! Keep walking!’

Even after he returned home alive, Kiguchi could not bring himself to believe that this had been an apparition. He was certain that his exact duplicate had stood at his side, berating him.

Van C. Gessel(tr.): *Deep River*⁽²¹⁾

上の英訳では、解釈上の間違いが一か所あるが、それはさておくとして、「もう一人の自分」が3つの異なる英単語で言い表わされている。replica, double, duplicate. ここまでくれば、thesaurusを引いている訳者の姿が彷彿とする。

V 置 換

おしるこが dish of jelly になったり、^{くつむし}轡虫が cricket になったりするのは、換わるべくして換わっている感じで、特別の感慨は湧かないが、白足袋が white gloves に姿をかえると、これは手品だと思ってしまう。

- * 二時間ほどして叔父さまが、村の先生を連れて来られた。村の先生は、もうだいぶおとし寄りのようで、そうして^{せんだいひら}仙台平の袴^{はかま}を着け、白足袋をはいておられた。(中略) お昼すこし前に、下の村の先生がまた見えられた。

こんどはお袴は着けていなかったが、白足袋は、やはりはいておられた。

太宰治『斜陽』⁽²²⁾

- * Some two hours later my uncle returned with the village doctor. He seemed quite an old man and was dressed in formal, rather old-fashioned Japanese costume. … A little before noon the doctor appeared again. This time he was in slightly less formal attire, but he still wore his white gloves.

Donald Keene(tr.): *The Setting Sun*⁽²³⁾

袴に白足袋は日本人の伝統的な礼装である（あった、と言うべきか）。だから、この箇所の白足袋が、たんなる白い足袋の意味でないことは言を俟たない。white socks なんて訳したら噴飯ものだろう。同じような場面で、同じように相手に敬意を示すモノは何か。white gloves というわけである。じつに巧みな置き換えと言わざるをえない。

上の例に出会ったとき大発見をした気になって一人悦に入ったが、その後、この工夫が、翻訳や異文化理解に関心ある人々のあいだでは旧聞に属することを知った。ガッカリしたことは言うまでもない。

これはこれとして、モノが他のモノに意図的に置き換えられた他の例を見てみよう。髪の毛が hair ornament に換わるというのはどうだろう。

- * ぼうっと島村を見つめていたかと思うと、突然激しい口調で、
「それがいけないのよ。あんた、それがいけないのよ。」と、じれったそうに立ち上がって来て、いきなり島村の首にすが縫りついて取り乱しながら、
「あんた、そんなこと言うのがいけないのよ。起きなさい。起きなさいってば。」と、口走りつつ自分が倒れて、物狂わしさに体のことも忘れてしまった。

それから温かくうる潤んだ目を開くと、

「ほんとうに明日帰りなさいね。」と、静かに言って、髪の毛を拾った。

川端康成『雪国』⁽²⁴⁾

* She gazed at him for a moment, then burst out violently: “You don't have to say that. What reason have you to say that?” She stood up irritably, and threw herself at his neck. “It's wrong of you to say such things. Get up. Get up, I tell you.” The words pour out deliriously, and she fell down beside him, quite forgetting in her derangement the physical difficulty she had spoken of earlier.

Some time later, she opened warm, moist eyes.

She picked up the hair ornament that had fallen to the floor.

“You really must go back tomorrow,” she said quietly.

Edward E. Seidensticker (tr.): *Snow Country*⁽²⁵⁾

別れが近いことを感じとり、さきほどまで「難儀なの」と言い訳めいたことを口にしていた女が、一転、男の「首に縋りついて」、二人は敷布団の上に倒れる…それから Some time later (英文は常に意味明瞭)、髪の毛を拾う。白い敷布上の一本の長い、黒い髪の毛。コトがおわったあと、女がそれを指先でつまむ。なまめかしく、そして侘しげな女の姿がありありと見える気になるのだが、英文の hair ornament (髪飾り) ではなんとなく物足りない。女の所作は同じだというのに、印象が違うのはどうしてだろう。人体の一部である髪の毛と、たんなるモノである髪飾りの差異によるものであろうか。それにしても、この場合どういう理由で置き換えがなされているのか、という肝心かなめのことが筆者にはよくわからない。

これに比べると、次の例はわかりやすい。わかりやすいだけでなく、着想の奇抜さが光る。

* そのお金で、思い切ってひとりで南伊豆の温泉に行ってみたりなどしましたが、とてもそんな悠長な温泉めぐりなど出来る柄ではなく、ヨシ子を思えば侘びしき限りなく、宿の部屋から山を眺めるなどの落ちついた心境には甚だ遠く、ドテラにも着換えず、お湯にもはいらず、外へ飛び出しては薄汚い茶店みたいなところに飛び込んで、焼酎を、それこそ浴びるほど

飲んで、からだ具合を一そう悪くして帰郷しただけの事でした。

太宰治『人間失格』⁽²⁶⁾

- * I did not hesitate to use the money to go by myself to the hot springs of southern Izu. However, I am not the kind to make a leisurely tour of hot springs, and at the thought of Yosiko I became so infinitely forlorn as to destroy completely the peaceful frame of mind which would have permitted me to gaze from my hotel window at the mountains. I did not change into sports clothes. I didn't even take the waters. Instead I would rush out into the filthy little bars that looked like souvenir stands, and drink gin until I fairly swam in it. I returned to Tokyo only sicklier for the trip.

Donald Keene(tr.): *No Longer Human*⁽²⁷⁾

焼酎が gin に姿を変えても驚かないが、ドテラが sports clothes (スポーツウェア) にヘンシンするのを見れば、おもわず息をのむ。暖房が完備した今日の温泉宿では、ドテラ (綿を入れた大きめの着物) が客に出されることはおそくないだろう。しかし、ついこのあいだまで、防寒用に一般家庭でもこれを着ていた。男は外から帰ると、洋服から着物に、寒いときはドテラに、着がえた。つまり、寛いだのである。この〈寛ぎ〉の意味を伝えるために、翻訳者は「ドテラにも着換えず」を「自分はスポーツウェアに着がえることもしませんでした」と英訳している。白足袋を白手袋に置き換える工夫にも劣らない、人の意表をつく、優れた発想だと思う。

雑 感

—おわりに代えて

これまで何度か『雪国』をテキストに使ってきたが、ほとんど例外なく、主

として会話部分を取りあげ、筋を追うことに終始した。よく知られている、汽車の「窓ガラスが鏡になる」場面に代表される、散文詩と呼んでもいいような部分は飛ばした。こういう箇所をこそ読まなければならないことは十分承知していたが、とにかく日本語がムツカシイ。とはいっても日本語なのだから声に出して読めば、心地よいリズムにのって、細かい意味まではわからなくとも全体の雰囲気だけはつかみとることができる。しかし、残念なことだが、英訳ではそうはいかない。文章の組立ては理解できる。従って、説明もできる。もし受講者のレベルが高ければ、あわせ読むことも一興だろう。感動にまでつながるかどうかは疑問だが。

比較的扱い易いとおもって選んだ範囲のなかに戸惑うような日本語文章がなかったかという、そんなことはない。一例をあげれば、

- * 島村が汽車から降りて真先に目についたのは、この山の白い花だった。急斜面の山腹の頂上近く、一面に咲き乱れて銀色に光っている。それは山に降りそそぐ秋の日光そのものようで、ああと彼は感情を染められたのだった。それを白萩と思ったのだった。

川端康成『雪国』⁽²⁸⁾

- * The first thing that had struck Shimamura's eye as he got off the train was that array of silver-white. High up the mountain, the *kaya* spread out silver in the sun, like the autumn sunlight itself pouring over the face of the mountain. Ah, I am here, something in Shimamura called out as he looked up at it.

Edward E. Seidensticker(tr.): *Snow Country*⁽²⁹⁾

ああと感情を染められる、というのはどういうことか。まったく、お手上げである。「感情」と「染める」の二語から、ある種の心持ちに浸ったことは想像できるが、「ああ」の具体的内容は何か。そもそも、具体的内容があるのかどうか。

Donald Keene 氏は『翻訳論』のなかでこんなことを言っている。原文が曖昧で色々な解釈ができるとき、どう処理したらいいか。原文の曖昧さを簡単に英語に移しかえることができる稀な場合は別として、そうでないときは、考えられうる意味のなかの一つを選び、それを明瞭に述べることがおそらく最良だろう、と。Edward E. Seidensticker 氏が同じ考えであるのかどうか知らないが、少なくともこの箇所では Keene 氏と同じ原則に立っている。「ああ、また来てしまった、あの女のいるこの温泉場に。萱を見上げる島村の心のなかで、何かかそう叫んでいた」曖昧さはどこを探してもない。

或ることに興味をもつということとそれについて人前で発表するということとの間には溝がある。それを飛び越えるためには、蛮勇を要する。何を大袈裟な、思われそうだが、こういうことを言うには訳がある。人については知らない。しかし、自分の能力のことは自分が一番よく知っている。日本語の能力、英語の能力。そして何よりも、文学の鑑賞力。これら三者の限度を思えば、出るのは溜息ばかり。そしてそういうときに考える。小論で言及したような事柄は、対談、あるいは鼎談、または読書会のような場で、複数の人間が議論するかたちをとれば、もっともっと膨らみを増すのではないか。それも、信頼できる内容を含みながら。そしてその作業を通して、異なる言語間の、異なる文化間の興味ある問題点がもっともっと鮮明に浮かび上がってくるのではないか、と。

了

注

- (1) Donald Keene: *Appreciations of Japanese Culture*, Kodansha International, 2002 (first edition 1971), pp.322-329
- (2) 志賀直哉、『小僧の神様・城の崎にて』、新潮文庫、1996年、p. 80
- (3) Shiga Naoya (tr. Lane Dunlop): *The Paper Door and Other Stories*, Tuttle, 1992, p.84
- (4) 丸谷才一、『横しぐれ』、講談社文芸文庫、1992年、p. 11
- (5) Saiichi Maruya (tr. Dennis Keene), *Rain in the Wind - Four Stories*, Kodansha (First Edition 1990), 1992, p.113
- (6) 太宰治、『人間失格』、新潮文庫、2002年、p. 63
- (7) Osamu Dazai (tr. Donald Keene), *No Longer Human*, Tuttle, 1981 (New Directions

- Publishing Corporation 1958), p.94
- (8)川端康成、『雪国』、新潮文庫、1987年、pp. 82-83
- (9)Yasunari Kawabata (tr. Edward E.Seidensticker): *Snow Country*, Tuttle, 1988 (Alfred A.Knopf, Inc.1956), p.101
- (10)大岡昇平、『野火』、新潮文庫、1990年、pp. 13-14
- (11)Shohei Ooka (tr. Ivan Morris): *Fires on the Plain*, Tuttle, 1996 (Alfred A.Knopf, Inc. 1957), p.17
- (12)遠藤周作、『海と毒薬』、新潮文庫、1991年、p. 53
- (13)Shusaku Endo (tr. Michael Gallagher): *The Sea and Poison*, Tuttle, 1991 (Peter Owen Limited 1972), p.56
- (14) (8)に同じ、p. 50
- (15) (9)に同じ、p. 61
- (16)萩原恭男 (校注)、『芭蕉 おくのほそ道』、岩波文庫、1997年、p. 40
- (17)Matsuo Bashó (tr. Donald Keene): *The Narrow Road to Oku*, Kodansha International, 1996, p.87
- (18)遠藤周作、『深い河』、講談社文庫、1996年、p. 138
- (19)Shusaku Endo (tr. Van C.Guessel): *Deep River*, Tuttle, 1994, p.86
- (20) (18)に同じ、pp. 138-139
- (21) (19)に同じ、pp. 86-87
- (22)太宰治、『斜陽』、新潮文庫、1990年、pp. 26-27
- (23)Osamu Dazai (tr. Donald Keene): *The Setting Sun*, Tuttle, 1989 (New Directions Publishing Corporation 1956), pp.23-24
- (24) (8)に同じ、pp. 65-66
- (25) (9)に同じ、p. 79
- (26) (6)に同じ、p. 112
- (27) (7)に同じ、pp. 156-157
- (28) (8)に同じ、p. 75
- (29) (9)に同じ、p. 93
- (30) (1)に同じ、p. 328

参考書

- 加島祥造+志村正雄、『翻訳再入門』、南雲堂、1992年
- 佐藤紘彰、『訳せないもの』、サイマル出版会、1996年
- 朝比奈誼、『コトバの壁』、大修館書店、1996年
- 中村保男、『翻訳の秘訣』、新潮選書、1995年 (初版1982年)
- 鈴木孝夫、『日本語と外国語』、岩波新書、1996年 (初版1990年)
- 安西徹雄、『英語の発想』、ちくま学芸文庫、2000年
- 安西徹雄、『英文翻訳術』、ちくま学芸文庫、1995年
- 金谷武洋、『日本語に主語はいらない』、講談社選書メチエ、2002年

柳父章、『翻訳とはなにか』、法政大学出版局、2003年（初版1976年）

September 30, 2003